

呉禱の漢訳チェーホフ

樽本照雄

呉禱といえは、ロシアのレー尔蒙トフ、ゴーリキー、チェーホフらの作品を中国で最初に漢訳紹介した人物として知られる。現代の辞典、翻訳史には普通にそういう説明がある*1。

この話法は、さかのぼれば1930年代に出現するようだ。

鄭振鐸のばあい

鄭振鐸「清末翻譯小説对新文学的影響」(『今代文藝』第1号1936.7.20。116頁)が姓を誤植して言及する。

^{ママ}英[呉]禱 光緒末年の人である。彼は日本語を深く理解し、チェーホフ[契訶夫]作品をもっとも早く翻訳した人だ(チェーホフの名前は当時「^{ママ}溪崖震[霍]夫」と訳した)。彼の翻訳は「黒衣僧」という本である。

鄭振鐸の短い記述は、それほど正確でもない。呉禱が行なった漢訳の題名は「黒衣僧」ではなく、「黒衣教士」だ。また、呉禱が日本語を理解したのはそうだが、彼がもとづいたのは日本語翻訳であったことをいわないのは不十分だろう。つまり、ドイツのズーダーマン、イギリスのガーヴィス、コナン・ドイル、フランスのモーパッサン、ポーランドのシェンキエヴィッチ、アメリカのマーク・トウェイン、ロシアのレー尔蒙トフ、ゴーリキーなどなど、外国原作についての呉禱の翻訳は、すべてが日本語経由、すなわち日本語からの重訳なのである。そうでなければ、世界各国の小説をひとりで翻訳することはほとんど不可能だ。別の方法でそれができ

るとすれば、複数の共訳者と一緒に漢訳をした林紓の「翻訳工房」くらいである。

阿英のばあい

阿英にはあの有名な『晚清小説史』（上海・商務印書館1937.5 / 北京・作家出版社1955.8）がある。

該書「第14章翻訳小説」において作品名を羅列するかたちで翻訳が紹介されている。例として呉禱の部分抜き書きしてみよう（〔 〕は1955年版）。

彼（呉禱）は日本語からレールモントフの「銀紐碑」^{ママ}（1907）、チーホフ（すなわち柴霍甫〔契訶夫〕）の「黒衣教士」（1907）を転訳した。……〔呉禱訳ゴーリキー（すなわち高爾基）の「憂患余生」（「カイン」1907）である〕。

280頁 / 184頁

ドイツでは呉禱訳ズーダーマン「賣国奴」（『繡像小説』）がある。281頁 / 185頁

翻訳家についていえば、林紓を除くと注目するにあたいする数人の人がいる。たとえば呉禱だが、彼の翻訳には、「薄命花」、「寒桃記」（日本黒岩淡香）、「車中毒針」（英国ブラック）、「寒牡丹」（日本尾崎紅葉）、「銀紐碑」^{ママ}、「黒衣教士」、「美人煙草」（日本尾崎徳太郎）、「五里霧」、「侠黒奴」（日本尾崎徳太郎）、「侠女郎」（日本押川春郎^{ママ}）がある。原本の選択には失敗があるにしても、しかし文学方面の修養は相当に高い。281頁 / 185頁

「原本の選択には失敗がある」という意味は、探偵小説を含んでいる、あるいは阿英にしてみれば知らない作家の知らない作品を選んでいることを指すだろう。

その反対に阿英が高く評価するのは、レールモントフ、チーホフ（のちにはゴーリキーを含む）らの作品を呉禱が翻訳しているからだ。

『晚清小説史』の1章だけでは翻訳について十分な説明ができなかった、と阿英は考えたのではなからうか。より詳しく記述する目的で彼の「翻訳史話」（『小説四談』上海古籍出版社1981.12）は書かれたように思う。末尾に1938年と記入されている。『晚清小説史』が刊行された翌年だ。また、鄭振鐸の文章とほぼ同時期の文章だといってもいい。ただし、当時公表されたかどうかは不明だ。読むことができるようになったのは1981年である。

阿英の文章からロシア小説の部分を抜き出して紹介しよう。呉禱の翻訳であるところが共通している。

(ゴリキー)最初の1篇は、呉禱の訳した「憂患余生」である。丁未(1907)の『東方雑誌』に4巻1期から4期まで連載して終了した。題名の下に「原名は「猶太人之浮生」である」と注記してある。著者名はまた「戈厲機」となっている。日本人長谷川二葉亭の訳本からの転訳だ。訳者の訳したロシア小説は少なくとも、かつ多くは名著であり、たとえばレールモントフの作品などは当時の翻訳家のなかで真にロシア文学を理解している人だということができる。

231頁

ゴリキー作、長谷川二葉亭訳「猶太人の浮世」(『太陽』第11巻第2、4号1905.2.1、3.1)の原作は、「カインとアルチョム」(1899)だ。レールモントフについては別の箇所に言及がある。

「憂患余生」の訳者呉禱は、ゴリキーを最初に中国に紹介したばかりか、最も早くにミハイル・レールモントフ(Mikhail Lermontoff 1814-1841)を東方に招いてきた。彼が翻訳したのはレールモントフの小説「銀鈕碑」である。これは光緒三十三年(1907)に商務印書館から出版された「袖珍小説」のひとつである。233頁

「(言情小説)銀鈕碑」は、これも日本語訳をもとに重訳している。レルモントフ作、嵯峨の家主「当代の露西亜人」(『太陽』第10巻5号1904.4.1)がそれであり、レールモントフ「現代の英雄」(1840。「ペーラ」部分)だ。

阿英が説明をしている呉禱訳チャーホフについても見てみよう。

チャーホフが東方にやってきたのにも彼の通訳である呉禱に感謝しないわけにはいかない。この呉という人はレールモントフを紹介したが、それで満足だとは決して思わなかったようで、さらにこの途中で転職した医者に来てもらった。彼はまず日本薄田斬雲の訳本から彼の名著「黒衣教士」を転訳した。趙景深の訳本でのいわゆる「黒衣僧」である。彼の紹介も光緒三十三年(1907)で

あり、刊行したのも商務印書館で「袖珍小説」に属し、レールモントフは隣人ということができた。ただし、彼の署名は「溪崖霍夫」と改められた。240頁

もってまわった書き方だ。中国に紹介した、あるいは作品を翻訳したと単純に書くことができる箇所にすぎない。「この呉という人」と書かざるをえなかったのは、当時、呉櫛の経歴についてほとんど何も判明していなかったからである。

戈宝権のばあい

戈宝権「契訶夫和中国」(『文学評論』1960年第1期1960.2.25)がある。彼の説明を見た方が早いだろう。

チャーホフの作品は、結局のところいつ紹介されたのか。今ある史料によれば、わかっているのは遠く清の光緒丁未年(1907年)において呉櫛が最初に彼の短編小説「黒衣教士」を翻訳し、これはたぶんチャーホフの作品の中国における最も早い訳本だろう。この小説は、日本薄田斬雲の訳文にもとづいた重訳であり、作者の名前は当時溪崖霍夫と訳され、上海商務印書館によって袖珍小説とされ六月に出版された。/(薄田は日本語訳巻末にチャーホフ紹介の短文をつけた。呉櫛はそれも漢訳している。戈はここにそれを引用する。今、省略。後出)/この短い跋文から、日本語訳本は1904年7月16日のチャーホフ逝去の後に出版されたことがわかる。私たちがここで付随的にいえるのは、呉櫛はわが国における早期のロシア文学紹介者のひとりであるということだ。彼はチャーホフの「黒衣教士」のほかに、同年に日本語からレールモントフの「銀鈕碑」(すなわち「現代の英雄」の第1部第1章「ペーラ」)およびゴーリキーの「憂患余生」(すなわち「カインとアルチョム」)を転訳した。83頁

呉櫛の翻訳についておおよそを紹介していることがわかる。日本人の訳が薄田のほかは、長谷川二葉亭、嵯峨の家主主人らであることには触れていない。概略だから、言及がないと責めるつもりはない。また、呉櫛の訳文を具体的に検討することも戈宝権の主旨ではなさそうだ。あくまでもチャーホフと中国の関係を紹介しているのだから以上で十分でもある。

最近の中国において呉櫛に対する評価はどうか。すこしだけ見ておきたい。

最近の中国における評価

陳建華『20世紀中俄文学関係』（上海・学林出版社1998.4）のばあいは、「第1章 清末民初的中俄文学関係」に言及がある。

あまり長い説明ではないから翻訳して引用する。

早期のロシア文学翻訳家のなかで、呉禱のレールモントフ、チェーホフおよびゴーリキーについて、陳緞のツルゲーネフについて、包天笑のチェーホフについては、みな相当に成功をおさめている。また、呉氏は最も早く白話を用いてロシア文学の名著を翻訳した訳者であり、ロシア文学の影響を拡大した点において一定の作用をおよぼした。しかし、馬君武にせよ呉禱にせよ多かれ少なかれ当時の翻訳方法の影響を受けており、原作を書き換えあるいは手を加えることがとても多く、ある翻訳はほとんど翻案したものまでである。たとえば、呉禱が訳したゴーリキー「憂患余生」の冒頭には、人物の容貌について描写をしたあと、次のような文章が出てくる。「まるで中国の田舎の家庭にかかっている鍾馗さまの絵図のようである」というところからその随意性を窺うことができるのだ。46-47頁

陳建華は、呉禱の先駆性、つまり口語（白話）を使用しての翻訳を高く評価している。だが、翻訳そのものについては、原文にはとらわれない自由な改訳を行なっているように説明する。例にあげた鍾馗さま云々の部分だけを示して、原文を改変したとんでもない翻訳であるかのように書いているのがその証拠だ。しかし、私は考える。だいいち呉禱は日本語訳にもとづいて漢訳しているのだ。日本語の訳文がもともとどのようなものなのか、まずそれを検証する必要がある。そのあるべき検討の手順を抜きにして、鍾馗がけしからん、原文とは隔たった漢訳にしていると結論を急いでいるように思う。まるで、呉禱の翻訳が全編書き換えだらけのような印象をあたえるではないか*2。

郭延礼のばあいは、呉禱訳についての評価は分かれている。尾崎紅葉の呉禱訳は代表作ではなく、多くが23流の作品だという（郭延礼『中国近代翻訳文学概論』漢口・湖北教育出版社1998.3。32頁 / 修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷。26頁）。この評価はそれほど高いものではない。ここに見る郭延礼の判断は、さき

に紹介した阿英の説明の半分、すなわち負の側面に影響を受けている。一方で、中国近代翻訳文学史上で業績のある翻訳家のひとりだと高い評価をあたえる。

郭延礼には以下の文章がある。「六 吳禱的俄羅斯文学翻訳」（「第5章 外国文学的訳介及其流播」『近代西学与中国文学』南昌・百花洲文藝出版社2000.4）。「俄羅斯文学的早期訳者吳禱」（『自西徂東：先哲的文化之旅』長沙・湖南人民出版社2001.4）。「俄羅斯文学三大名家的早期訳者吳禱」（『文学經典的翻譯与解讀 西方先哲的文化之旅』濟南・山東教育出版社2007.9。「俄羅斯文学的早期訳者吳禱」と同文）。

紙幅を比較的多くとって説明している『近代西学与中国文学』から、郭延礼の下した評価を抽出する。吳禱翻訳の特色を4点あげている。

第1は、翻訳の専門家であるという。多くの翻訳家が創作をも行なっていたが、吳禱は創作をしなかった少数者のひとりだ。翻訳態度は十分に厳格で質が高い。

第2は、白話を用いて翻訳している。近代翻訳文学史上では重視する価値がある。

第3は、文学的素養が高く作品の選択眼がある。

第4は、翻訳小説は各国にわたっており、小説類型も比較的多い。ここでいう類型とは、社会、英雄、冒険、偵探、歴史、軍事、言情などのこと。

以上の4点は、吳禱訳についての比較的高い評価となっている。しかし、欠点があることをいわずにはいられない。吳禱が日本語から転訳している事実をふまえて以下の説明になる。

日本翻訳文学初期の多くの弱点（たとえば原作について補筆削除、改造を行なうこと）も吳禱の訳文中に再現するのを避けることができなかった。215頁

郭延礼は、同じ文章を『自西徂東：先哲的文化之旅』（25頁）でも使っている。彼が下した評価は動かないものになっていることがわかる。

日本の翻訳文学には、郭のこのような補筆削除改造を行なうなどの弱点をかかえた作品もあったであろう。ただし、そのことが吳禱の翻訳したもとの作品に当てはまるかどうかは別問題ではないか。ここでも踏むべき手順を無視しているような気がする。すなわち、吳禱がもとづいた日本語訳を手元においていちいち検討する必要があるといたいのだ。郭延礼がそれを行なって上のような結論に到達したというのであれば、私は納得する。しかし、郭がその作業をすませたうえで書いたとは考えられない。軽率な判断であったように思う。

連燕堂『二十世紀中国翻訳文学史 近代巻』（天津・百花文藝出版社2009.11）の第11章では、ロシア文学の翻訳を解説する。第4節で呉禱の翻訳が紹介されている。

阿英の文章を引用しながら説明するのはよい。呉禱がもつづいたのは薄田斬雲の日本語訳であるというのもよい。

連燕堂も、チェーホフについて紹介した短文の漢訳文をそのまま引用する。そこまでは、問題はない。ただし、この呉禱の訳文について奇妙な解説をつけている。すなわち、「チェーホフは1860年に生まれ1904年に死去した。そうするとこの文章は1904年に翻訳されていなければならない。なぜ1907年になってようやく出版されたのかわからない」（283頁）

この疑問が提出されたのは、チェーホフ紹介の短文も呉禱が書いたと連燕堂が勘違いしたからだ。呉禱が独自に書き下ろしたチェーホフ紹介は、チェーホフの死後だから1904年に書かれている。だから、漢訳の出版が1907年にのびた理由がわからない、という意味だ。

連燕堂は、呉禱の訳文は見ている。だが、薄田斬雲の日本語訳文は手元において検討していないらしい。もともとチェーホフ紹介がなされていることに気づかなかった。中国で日本語文献を見ることはむづかしいようだ。だが、と私は考える。戈宝権の前出論文を読んでいれば、その間違いは事前に防ぐことができたのではなからうか。戈は、日本語訳文にそれがあることをすでに述べているからだ。

本稿では、呉禱の漢訳チェーホフを検討する。もとになった薄田斬雲の日本語訳から説明をはじめよう。

薄田斬雲のばあい、あるいは雑誌『太陽』

薄田斬雲（本名貞敬。1877-1956）は、東京専門学校（のちの早稲田大学）卒、新聞記者だった*3。翻訳「黒衣僧」は、『太陽』第10巻第13、14号（1904.10.1、11.1）に掲載された。第13号は「露国チエコーフ作」とし、第14号では「魯国チエホーフ作」となっている。アントン・チェーホフ（1860-1904）の「黒衣の僧」（1894）である*4。

薄田の日本語訳末尾には「アントン、チエホーフ氏」という短文がついている。チェーホフを紹介して「ゴルキーと相列んで、露国文壇を飾れり。短篇作者にして、露国のモーパッサンと称せらる。文章簡潔にして犀利、常に人間の短所、缺点を描く。これ人間世界を見て、到底救ふべからず、はた改善すべからずと思惟したる結

果、極めて冷談^{ママ}に、社会を觀察したるが故なるべし。氏は本年七月中旬、独逸国の
転地先にて長逝せり。年四十四。世界の文壇は一美花を失へりと謂ふべし」(傍点
省略)と書く。これは、呉禱の翻訳にも直訳されて収録される。本稿で戈宝権の文
章を紹介したときに省略したのが、まさにこの部分の呉禱漢訳である。

薄田がもつづいた原作がロシア語であったかどうかの記述はない。しかし、チェ
ーホフを訳して「チエコーフ」とするのが気になる。英語表記を英語読みすればそ
うなりそう。ロシア語では考えられない。

さきに呉禱の翻訳は世界の各国におよんでいることをのべた。アメリカ、フラン
ス、イギリス、ドイツ、ポーランド、ロシアなどなど。日本人の作品を単行本から
漢訳したのを除いて、日本語経由の重訳はほとんどが雑誌『太陽』に掲載された作
品である。呉禱が広く日本の雑誌に目を配り、興味をいだいた作品を選択したとい
うわけではなさそう。掲載雑誌がほぼ『太陽』に限定されている。ということは、
呉禱が上海で入手できた雑誌がたまたま『太陽』だったことか。それとも呉禱の興
味を引く作品が掲載されていたから『太陽』を購入したのか。あるいは友人から送
られたものか。詳細はわからない*5。

その『太陽』に収録された小説作品が充実していた、あるいは呉禱の選択眼にか
なったものが多かった。結果としてそうになっている。1902年発行の『太陽』から
作品選択がはじまり、ロシア小説は1904年から1905年にかけての掲載になる。そ
の背景には日露戦争があったことは容易に推測できるだろう。ほかの作家では、ツ
ルゲーネフ、トルストイの名前が該誌に見える。呉禱が仮にそれらを漢訳してい
たとしたら、中国では早い時期の紹介になったはずだ。実現しなかったのは残念なこ
とだった。

さて、チェーホフ「黒衣の僧」の呉禱訳である。

呉禱の漢訳チェーホフ

呉禱訳「(神怪小説)黒衣教士」9章は、1907年に単行本で刊行されたようだ。
刊行状況は以下のとおり。

1 (俄)溪崖霍夫著 呉禱訳 商務印書館 光緒三十三年(1907)未見

[阿英148][丁未4]は六月出版とする[中日880.008][蒲梢282]THE BLACK
MONK[劉晩258]

2 (俄) 溪崖霍夫著 (日) 薄田斬雲訳 呉禱重訳 上海商務印書館 光緒三十三年六月(1907) 袖珍小説 未見

[現代902][大典138]は1907.7刊とする。『東方雑誌』8:1広告[編年187][劉晩258][慧敏461]

3 (俄) 溪崖霍夫著 (日) 薄田斬雲訳 呉禱重訳 上海商務印書館1907 / 1914三版 袖珍小説 未見

[民外2924]『東方雑誌』8:1広告[営業376][劉晩258][慧敏461]

4 (俄) 溪崖霍夫(契訶夫)著 呉禱訳 阿英編『晚清文学叢鈔』俄羅斯文学訳文巻 北京・中華書局1961.10

5 (俄) 溪崖霍夫著 呉禱訳 『中国近代文学大系』11集26巻翻訳文学集一 上海書店1990.10

據《袖珍小説》本，上海商務印書館1907年6月版。

作品に言及する資料名を略して注記した箇所がある。これらは無視してほしい。細かいことだが、5の大系版に見える「1907年6月版」というのは、西暦年と旧暦「6月」の新暦旧暦混用表示である。

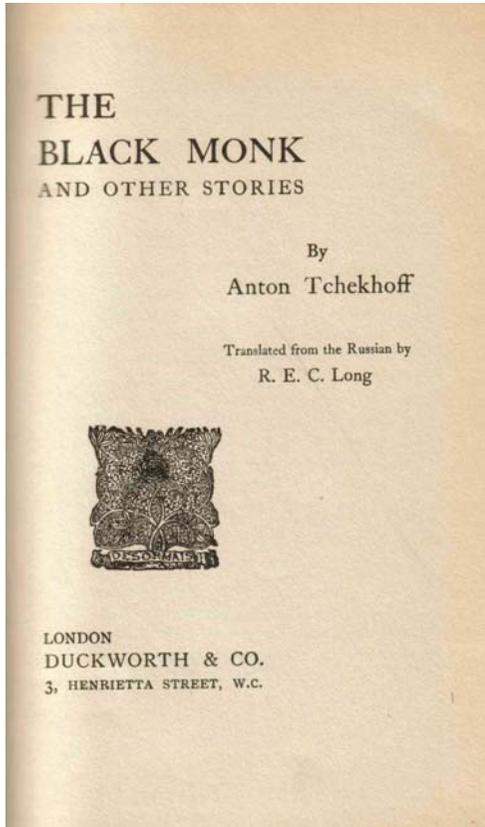
本稿では、5の大系版を使用する。

薄田斬雲の翻訳を見るために、冒頭部分のロシア語からの日本語訳をまず引用しよう。

学士のアンドレイ・ワシーリイチ・コヴリンは、疲労こんぱいのあげく神経を痛めた。別だん治療は受けていなかったが、ある時ぶどう酒を飲みながらふと友人の医師にその話をしたところ、春と夏を田舎へ行って過すようにすすめられた。折からターニャ・ペソーツカヤが長い手紙を寄越して、ポリーツカヤへ泊りに来るように頼んで来た。そこで彼も本当に出掛ける必要があるぞと心にきめた。351頁

主人公コヴリンが学士号を有し、しかも精神に異常をきたしているという設定だ。幼なじみのターニャが後に彼の妻になるなど、物語がはじまった時点ではわかるはずもない。物語が進んでいって徐々に事情が判明するようになっている。

次は薄田の日本語訳である。総ルビは省略する(以下同じ)。



【薄田】マヂスターの、アンドレー、ワシレウ井ツチ、コウリンと呼ぶ男が、過労の極、神経の錯乱を来たした。併し、相当の治療も受けずに打棄り放して置いたのを、一日、酒席の上で医者をして居る自分の友人に話すると、其の医者は、彼に春と夏中を田舎で過ごす様にと勧めた。時恰かも好し、ポリソウカのタンヤ、ペソトスケーと云ふ妙齡の処女から、此地へ御越しになつて当分父と御一所に居て下さいと云ふ意味の長い手紙が来た。で、コウリンは愈よ行く事に極めた。115頁

「学士」がないと思えば、「マヂスター」がそれに当るらしい。原文からの翻訳を見ているからそう推測できる。しかし、普通ならばなんのことも理解できない可能性もある。ある英訳*6を見れば、「who held a master's degree at the University」だから「マスターの学位」だ。

マジスター (Magister) をそのまま使用する英訳本がある。チャーホフ Anton Tchekhoff 著、ロング R.E.C.Long 訳 *THE BLACK MONK AND OTHER STORIES* ,

LONDON: DUCKWORTH & CO.1903だ。

ここからしても薄田訳の原本である。説明的だがマスターの学位くらいに翻訳してくれればよかった。薄田の訳は、すこし不足しているといわなければならない。「ぶどう酒を飲みながら」が「酒席の上で」となる。同じ意味だといえそうだが、会話のためのぶどう酒かも知れず、酒席は訳しすぎだろう。ターニャからの長い手紙の内容を翻訳では少し加筆している。薄田訳は、それでもほぼ原文に近い。

呉禱訳は以下のとおり。

【呉禱】馬齊司篋地方，有個性安特立華列維忒，名叫柯林的男子，因為過於勞動，心神非常紛亂，也不找醫生療治，却取得放任主意，聽其自然。有一天，在某處酒席之上，對一個行醫為業的友人，談起這個病症。那醫生就勸他每逢春夏兩季，最好到鄉村里居住。其時恰好卜利索加妙齡處女丹霞白叔忒斯開，寄來一封極長的書信，內中文句，是敦促柯林前往他那邊去，和他父親一起同居的意思。恁地，柯林出門下鄉的主意，益發打定。594頁

マジスター地方に姓をアンドレー・ワシレウ井ツチ、名をコウリンとよぶ男がおり、働き過ぎで精神が非常に錯乱したが、医者に治療をしてもらいもせず、放任したまま自然にまかせた。ある日、酒席の上で医者をしている友人にその病症を話した。その医者は彼に春夏には田舎ですごすのがよいと勧めた。その時、ちょうどボリソウカの妙齡の処女タンヤ・ペソトスケーから長い手紙がきており、そのなかに彼女のところにおいてになって父と一緒にいてくださいとコウリンにねんごろに促していた。そういうことでコウリンは田舎に行くことに決めて出発した。

呉禱訳の固有名詞について私が薄田の日本語訳を使用するのは、比較対照するのにわかりやすいと考えるからだ。

最初の「マジスター」を呉禱が地名だと理解したのは、しかたがない。学位だと理解する手がかりはこの日本語訳にはないからである（ただし、第6章で「マジスターの位」123頁と出てくる。だが、呉禱訳はこれを含めた前後部分を省略した）。つぎの姓名を反対に取り違えたのは、西洋の習慣についての知識が不足していたことを示す。それ以外は、薄田訳に忠実な口語（白話）訳になっていることが理解できるだ

ろう。

ターニヤの父はロシアでも有名な園芸家であり、コヴリンが幼いころの養父でもあった。広大な屋敷と古風で陰鬱な庭園を描写して次のような表現がある。

ペソーツキーの屋敷はすばらしく大きかった。何本もの円柱が立ち並び、そこここに漆喰のはげ落ちたライオンの像が飾られ、車寄せには燕尾服すがたの従僕がひかえていた。351頁

その下には川の水がぶあいそうに輝き、しぎが哀れっぽい鳴き声をあげながら飛び交い、351-352頁

この2カ所はなんでもないように見えて、薄田訳では訳し落としと誤解がある。

【薄田】ボリソウカなる、ペトスケー氏の邸宅は、一列の柱を前面に見せた宏大な建物であつて、玄関には幾ツかの獅身像を飾り立て、115頁

その下には、一條の淋しい流れがきらきらと溶り走り、上には無数の蛇が悲しげな鳴声をして、樹の枝に纏はつて居るので、115頁

燕尾服を着た従僕がいない。シギがどういふわけか蛇になって鳴き声をあげている。

【呉禱】ト利索加白叔忒斯開の住宅、前面有一座極宏大的房子、一律排着粉白的棟柱、大門上塑成幾個獅身像形。594頁

ボリソウカのペトスケー氏の住宅は、前面に広大な建物があり、白い柱がならんでいて玄関にはいくつかの獅身像がつくられている。

那下面、一条清澈見底的溪水，潺潺溶溶的瀉出；上面呢，總有無数条蛇，發出那悲鳴之声，盤繞在樹枝樹根之上。595頁

その下には澄み切って底の見える谷川がさらさらと流れ、上には無数の蛇が悲しげな鳴き声をあげて樹の枝と根にまとわりついている。

広いロシアのことだから鳴く蛇もいるだろう。呉禱は疑うことなくそれらをそのままに漢訳した。

つぎの自然描写を見てほしい。呉禱の翻訳能力は、相当に高いといえる。

【薄田】春は今始まつばかり、最上の珍異と賞つべき種類の花はまた大方草の下に蔭されて居る。併し花徑や、苗床には、疾くにそが美妙的な姿の一帝国をも象るに足る丈の様々な花は、爛漫と咲き乱れて居た。さはれ、此の広大な庭園に在つて尤も人の心を惹く光景は、あり丈けの花弁に葉に、朝早く置く露が玉と散る時である。116頁

【呉禱】如今春天剛才起頭，那些品評做最上等珍異的花種，大半都隱藏在草茵之下。但是花徑啊，和那草地，儼然自成美妙豐姿的一個完全帝国一般；無数樣的花兒，都開得爛漫，如火如荼。在這廣大園林，那惹人心目的風景，益發在清晨早起，無数花瓣葉英之上，露水散落如珠如玉之時。595頁

春は今はじめたばかり、最上等の珍異と評されるあれらの花の実は、大半が草のしとねの下に隠されている。しかし、花徑や草地には、まるで自然にできた美妙的な容姿の完全な帝国のように、無数の花が非常ないきおいで爛漫と咲いていた。この広大な庭園において、人の心を引く光景は、朝早くに無数の花弁と葉のうえの露が珠玉のように散る時である。

薄田の訳語を利用しながらうまく白話におきかえている。呉禱には、表現する力がそれだけ備わっていた。

呉禱の訳文をほめたすぐあとにその不足をいうのは気がすまない。細かいところだが、事実は事実だ。

【薄田】ペトスケー氏が、賤しめて屑物と呼びなしてあつた花園中一番飾り立てられた部分は、116頁

【呉禱】白叔忒斯開在花園裏裝飾的处在，595頁

ペトスケー氏が花園で飾り立てたところは、

樹木をピラミッド型に刈り込み球状にし燭台に形作ったり、と人工的に加工したところを「賤しめて屑物と呼びなして」いる。呉禱はそれを削除した。また、ひとつの人工形状を説明して「モノグラムや」と訳したのは薄田だ。ここを見ても原文は英語 monograms である。文字を組み合わせた家紋のことかと思う。呉禱は、そ

の意味が理解できなかつたらしく「ガラス部屋 [玻璃屋]」にした。

呉禱訳の不足だけをいうのは不公平だ。薄田訳の間違いを呉禱が訂正している例もあるからだ。

コヴリンが回想して、ターニャのいる果樹園から出ていったのは5年前だったという。

【薄田】五年後、僕が此処に居つた時は貴嬢は一切な赤児さんだつたんだ。

117頁

「五年後」は、明らかに「前」の間違いだ。そこを呉禱は「五年之前」(597頁)と正している。これは、よろしい。ところが、その直後にまた勘違いをする。

【呉禱】我総受你的寤受你的欺。597頁

僕はいつもあなたからさんざんな目、ひどい目にあわされていました。

ところが、薄田の原文は、呉禱とは反対だ。からかっていたのはコヴリンの方だった。

【薄田】平生も僕に寤められたものでしたつけね。117頁

呉禱は、上海で日本語を学習しただろう。だが、漢字を頼りに漢訳しているのは一般の中国人とかわらない。「僕」と「寤め」が目に入ったから、動作主が「僕」だと理解したらしい。こまかい箇所だといえば、そうだ。

細かいついでに、ターニャの父エゴル老人についても小さな誤解がある。エゴールは背が高く肥満で、そのくせ足早だから一緒に歩いていたコヴリンが追いつくのに苦勞をする、という場面だ。

【薄田】エゴル老人は、背の高い、肩幅の広ひ肥大った男で、息使を苦しげにして夫れでコウリンが追付いて行くには苦しい程に健脚であつた。118頁

薄田訳には「夫れで」とあるものだから、これが誤解のもとになったものか。

「しかし」とか「夫れでいて」とかであれば話は違ったかもしれない。

【呉禱】愛哥兒老人，原来是脊高肩広、身体肥大的男子，行歩起来，覺得很為蹣跚，跟在柯林背後，勉強支起氣力的走。598頁

エゴル老人は、もともと背の高い肩幅の広い、身体の太った男で、歩くとひよろひよろするものだから、コウリンの後ろについて無理矢理氣力をふりしぼって歩いた。

「コウリンが」と日本語にあるのだから、動作主ははっきりしている。だが、呉禱は前後関係から判断して誤ったと思われる。

小説全体の流れからは関係のない細かい点ではある。しかし、呉禱の日本語理解力を知るためにはこういう小さい箇所を見逃すことはできない。

かといって呉禱の日本語力を判定して厳しすぎるのもいかなものかと思う。薄田の時代では普通の語彙が、現代では理解しにくくなっている部分もある。呉禱にとってはいくら同時代だったとはいえ、やはり外国の文章である。

コヴリンは心理学の講義を行なっている。哲学が主である、というという会話がエゴール老人と持たれる。それが生きがいだともコヴリンは話すのだ。老人はそれを聞いて何といったか。

【薄田】ま、御方便様な…… 118頁

「それは結構だ」という意味である。文脈からすれば、わからないこともない。日本語辞書には「神仏のおかげ」と説明がある。しかし、これを見た呉禱にとっては、漢訳するのは容易ではなかつただろう。

【呉禱】呀！你替我設個法兒罷。…… 599頁

や！わしのためになんとかしてくれんかね。……

日本語の「方便」は方法という意味だから、上のような漢訳にしてみましたしい。普通は、これでは話のつじつまがあわない。とはいいいながら、これが誤りであるかといえばそれほど簡単ではないのだ。第4章で娘のターニャとケンカをした老

人が気弱に「情けない」「困った」とつぶやく場面がある。薄田はここにも「御方便様」(125頁)を当てている。するとここを呉禱が「你替我設個法兒罷！」(609頁)と訳すのは、妥当ということになる。

どのみち、これもまた小さな箇所すぎない。読み飛ばせば大筋からはずれるといってもないだろう。

「黒衣の僧」とは何か。

コヴリンの頭から離れない黒衣の僧が、実際に彼の目前に姿をあらわした。その瞬間は、こうだ。

【薄田】黒装束をした一人の僧が髪は灰色に、眉は黒く、胸の上に手を十字に組んで通り過ぎるのである。其の素足は地を離れて行き、コウリンを二十ヤードも乗り越した時、彼の僧は顔を此方に向けて、頭を点頭せが、そして親しげに、又狡猾しげな笑を浮べた、其の顔は蒼白く肉薄く見えた、121頁

黒衣の僧は、竜巻とも見えるつむじ風とともに出現したのだった。

【呉禱】原来是黑色装束的一个教士。頭髮灰色，眉毛純黑，胸口上結成一個十字，自由自在走了過去。他的脚離地而行，并不着土，大約和柯林離開二十耶特(碼)遠近。那教士臉向着這邊，对他点一点頭，又現出狡猾勻猾的笑容可掬。看他臉色，乃是蒼白削肉。603頁

なんと黒装束の僧であった。髪は灰色に眉は黒く、胸のうえで十字を結んで思うがままに通り過ぎていった。彼の足は地を離れて地面にはつかず、コウリンを約20ヤードも離れると、その僧は顔をこちらに向け、彼にうなずき、狡猾そうなあふれんばかりの笑みを浮かべた。その顔色を見れば蒼白で痩せていた。

呉禱の訳は、原文を過不足なく正確に写し取っていることがわかる。

物語の冒頭で主人公コヴリンは精神を病んでいることが明らかにされている。黒衣の僧について考えはじめたのは、発症あるいは再発の予兆だ。その黒衣の僧が出現した。これは、実際に発症してしまったことを意味する。

黒衣僧が主人公の幻想であることは、黒衣僧の発言のなかで説明される。薄田と

呉禱の文章を並べる。

【薄田】古話も蜃気楼も、私も 皆なお前の兀まつた想像から出たのぢや、
私は幻像ぢや 118頁

【呉禱】什麼古話，什麼蜃楼，什麼我 都是從老兄自己心中的意像出来的，
我原是幻像啊！612頁

古話も蜃気楼も私も みな貴兄自身の心中の想像から出てきたものじゃ、
私はもともと幻像なのじゃ。

主人公と黒衣の僧とは、永遠の真理、永遠の生命の目的について問答をくりひろげる。いわば哲学的会話のはじまりだ。心理学、哲学を専業とする主人公にはふさわしい。では、自己の狂気を意識していないのかといえば、そうではない。主人公は、いう。

【薄田】何うしても貴様は幻像だ、精神病の影だ。詰り、乃公は精神上の病人だ 具合が人並でないのだらう 119頁

【呉禱】不論如何，閣下是個幻像，是個精神病的影子，未了児我必变成精神上的病人，那形状就不和常人一樣。613頁

どうしてもあなたは幻像だ、精神病の影だ。つまり、私は精神上の病人になったに違いなく、普通の人のようにではないのだ。

黒衣の僧は主人公を大天才の列に入らせ、神に選ばれた人であり、詩人、哲人、理想に殉じる人だと指摘する。主人公は答える。

【薄田】乃公が是迄始終考へた事を貴様が今又繰り返して云ふとは実に奇跡だ。宛で、貴様は、乃公の傍に隠れて居て、乃公の秘密な考えを聞き取つてゞも居る様な気がするね、120頁

【呉禱】我向来尽着搜索思想的事，如今閣下又幾次三番説来，真正奇怪得很，簡直似閣下隱躲在我身傍，偷看我心中的機密一般。614頁

私がいままで考えたことを、あなたが今くり返していうとは実に奇妙だ。まるであなたは私のそばに隠れていて私の心中の秘密を盗み見ているようだ。

黒衣の僧とは、コヴリンのなかのもうひとりの自分にほかならない。自分自身と会話しているのだから恐ろしいどころか楽しいはずだ。話が合うのは当然なことだった。ふたりの会話回数は増え、時間も長くなる。病症が進行しているという意味である。

コヴリンはターニャと結婚した。夜、眠ることができず黒衣の僧と名誉あるいは幸福について議論をしている。そこに目覚めたターニャにいわれてコヴリンは自分が発狂していることを深く知る。その後、医者からの治療を受けコヴリンは治癒した。

主人公の健康は回復した。黒衣僧も現われなくなった。これで物語は完結する、か。それでは普通の小説だ。チェーホフのばあいは、そうはならない。

コヴリンが健康になってかえっていらだつのは、発狂していた時の、鋭敏で、活潑で、幸福でさえもあった状態を失ったからだ。健康で凡庸であるくらいならば、精神錯乱のままにいたかったという。コヴリンは、ムハンマドを例にあげる。

【薄田】若し、マホメットが其の神経を療治すると言つてポツタシユーム剤を飲み、勉強は一日二時間限りにして、沢山牛乳を飲んだとしたら此の不世出の偉人が後代に残す所は自分の飼犬が残す位のほんの僅少ばかりの物だったらう、
127頁

コヴリンがいうのは、あくまでもムハンマドについてだ。「ポツタシユーム剤 potassium bromide」（別のところでは「ホツタシム」）とは臭化カリウムのこと。偉人が恍惚境地のなかで歴史に残る大きな精神的活動を行なったといたいのだ。そこを呉禱はどうしたわけか取り違えてしまった。

【呉禱】若是摩漢默德説能医治那人的神经，叫他飲朴塔秀姆的藥水，那便好了。我每天讀書，只限兩点鐘，又飲許多牛乳，這不出世的偉人，留遺後代的，惟有我自己留与飼狗的些須之物。623頁

もし、マホメットが彼の神経を治療できるといってポツタシユーム剤を飲ませるのであれば、それもよからう。私が毎日の勉強を2時間限りにしてたくさん牛乳を飲んだとしたら、この不世出の偉人が後代に残すものは、私自身が飼

い犬に残すわずかなものであるにすぎない。

ムハンマドと自分の関係があいまいになっている。精神錯乱をおこしたことがあるコヴリンだから、いうことがチグハグであっても不思議ではないということか。

ここまでのコヴリンは、病気が治癒したといいながら、実はそうではない。治療薬を飲んでいる。ターニャに向かって彼女の父親を罵倒するのである。

最終章でのコヴリンは、精神病から立ち直っている。しかし、肺を患っているらしい。ターニャとは離婚した。彼女がよこした手紙（呉構はこの部分を文言で翻訳している）は、コヴリンに対する憎しみと怨みと呪いの言葉で埋められている。「妾は大底心から貴方を憎むので、早く貴方が死んで了へば良いと祈ついて居ます」（130頁）「今妾増^{マツ} [憎] 恨於君，銘心鏤骨，朝夕馨香，惟祝君早死則幸耳（今私はあなたを憎悪して心に刻んでおり、朝から晩まで香をたいてあなたが早く死ねばよいと願っているだけです）」（628頁）。「処が貴方は立派に狂人なのです」（130頁）「而焉知君為不出世之狂人！（ところがあなたが世にまれな狂人であったとは！）」（628頁）

コヴリンは15年間も昼夜をわかつたず勉強し、激しい精神病を患い、結婚しそれに失敗し、その結果自分が凡人であることを自覚したのだった。

その時、黒衣の僧が、竜巻とも見えるつむじ風とともに出現した。精神錯乱の再発である。自分が神に選ばれた大天才であることを認識する瞬間だ。コヴリンは吐血して死ぬ。「併し、其の顔には動かしがたい幸福の微笑が凝てあつた」（132頁）「但柯林的面顔，還凝着微笑，依旧似享着幸福一般（しかし、コヴリンの顔には微笑がかたまりついておりまるで幸福を享受しているかのようだった）」（630頁）

結 論

チャーホフの原作は長くはない。しかし、内容的には豊富な作品だ。枠組みをいえば、コヴリンとターニャの恋愛物語であり、破局するから恋愛悲劇でもある。

物語に盛られたものはといえば、少し複雑である。黒衣の僧は現実には存在しないが精神的には実在する。存在しないものが出現するから、ゆえに幻想小説だ。生きる意味を考えるから哲学小説でもある。狂人を主人公とした心理学小説ということもできよう。探偵小説でもなければ冒険小説でもない。

そういう作品を呉禱が選択して翻訳したことが、まず第1の功績である。当時の翻訳界では、たしかに探偵小説、あるいは冒険小説が読者から歓迎されていた。だが、実状はそれほど単純ではないのだ。呉禱の漢訳チャーホフによって、当時の入り交じった翻訳界の状況を理解することができる。五四時期以降に作家となった人たちにしてみれば、どうか。彼らが文学的修行のひとつとして、つまり養分として吸収するだけの材料が呉禱によって提供されていたと考えることは可能だろう。

呉禱の漢訳には、小さな勘違いはある。例としてあげすぎたかも知れない。強調してよいのは、それらの誤りはささいな部分にすぎないことだ。また、大筋にあまり関係のないいくつかの箇所は省略している。しかし、大きく加筆して話を作りかえたところは、まったくない。日本語原文にほぼ忠実な漢訳になっていることは事実だ。しかも、こなれた白話を使用している点を評価しなければならない。文言で多数の翻訳を行なった林紘と同時代にあつて、呉禱の白話訳は独自に存在するといつていい。第2の功績である。

ついでにいえば、翻訳と創作、あるいは語りの人称が異なるとはいえ、狂人を主人公にしているという点だけを見れば、魯迅「狂人日記」にくらべて10年以上もさかのぼる。陳景韓「催眠術」よりも2年先行する*7。 四

【注】

- 1) たとえば、つぎのもの。林煌天主編『中国翻訳詞典』武漢・湖北教育出版社1997.11。734頁。謝天振、查明建主編『中国現代翻訳文学史(1898-1949)』上海外语教育出版社2004.9。67頁。また、呉笛等『浙江翻訳文学史』杭州出版社2008.1。30-34頁。「第1編 清末民初浙江翻訳文学」の「第4章 呉禱与俄羅斯文学」において呉禱とロシア文学を説明する(呉笛執筆)。
- 2) 別稿「呉禱の漢訳ゴーリキー」を参照のこと。
- 3) 斬雲については、横田順彌『明治ふしぎ写真館』(東京書籍株式会社2000.6.8)がある。「元祖マルチ・ライター？」と表題がついているくらいに多作の人であつたらしい。
- 4) 日本語訳はほかに以下を参照した。神西清、池田健太郎訳『チャーホフ全集』9 中央公論社1960.5.15。チャーホフ作、松下裕訳『六号病棟・退屈な話他五篇』岩波文庫2009.11.13。「黒衣の僧」の引用文は前者のページ数を示す。

- 5) つぎの論文がある。寇振鋒「中国の『東方雑誌』と日本の『太陽』」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)『メディアと社会』創刊号 2009.3.31電字版
- 6) “The Black Monk”, *The Lady with the Dog and Other Stories* by Anton Chekhov, translated by Constance Garnett, New York: Macmillan Company, 1917. 電字版
- 7) 范伯群「1909年発表の一篇“狂人日記”」『清末小説から』第76号 2005.1.1。改題して「《催醒術》：1909年発表の“狂人日記”」は『江蘇大学学报(社会科学版)』(2004年第5期)に掲載。のち、「《催醒術》：1909年発表の“狂人日記” 兼談“名報人”陳景韓在早期啓蒙時段的文学成就(附《催醒術》原文)」『多元共生的中国文学的現代化歷程』(上海・復旦大学出版社2009.8)所収。

(たるもと てるお)